

との ばし
殿 橋

中部地方の
選奨土木遺産

所在地：愛知県岡崎市 竣工年：1927（昭和2）年
 管理者：愛知県

認定理由：乙川に架かる12径間連続RC桁橋で、昭和2年竣工以来、補修を加えながらも多柱形式のスレンダーな形姿を保つ岡崎市街のシンボリック遺産である。

令和3年度登録

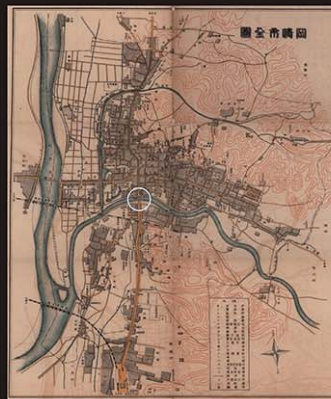


下流左岸側からみる殿橋の風景。橋の周りには憩いの場ができています。

1888（明治21）年に開駅した東海道線の岡崎停車場と岡崎城下町の間には3km余りの距離があり、その間を鉄道（はじめ馬車鉄道、1912年に岡崎電気軌道）で結んでいた。岡崎城に南接する乙川に、17世紀に藩主本多忠利によって築かれた殿橋は、この時代にも市街地の入口として重要な位置にあった。大正末期、岡崎市では都市計画の施行に先駆けて、有力者の後押しにより市街地の道路改修が盛んになっていた。この機運の中、「岡崎市の門戸」にあたる県道の殿橋は「最新型」の橋梁へ架け替えられ、並行していた電気軌道と道路は、24万1523円の総工費をかけて一本の近代橋にまとめられた。

岡崎市の「一偉観」といわれた殿橋の姿は、今も現役の道路橋として見事に遺されている。特に2014～2015（平成26～27）年の改修では、損傷の補修のみならず耐震性の向上と長寿命化が図られたが、既存の構造・シルエットを極力維持する方針で検討され、主桁と床板を鋼板や炭素繊維プレートを用いて連続化させる工法が採用された。新技術により遺産を遺した好事例であるといえよう。

現在では岡崎市の公共空間活用のトライアル運動 QURUWA の中に位置付けられ、まちづくりの1拠点としての役割を担っている。



▲ 岡崎市土木課作成の岡崎市全図（1924）。東海道本線岡崎駅から北へまっすぐ伸びる道路が岡崎城下へ乙川を渡って入る箇所が殿橋。殿橋はまだ道路橋と鉄道橋が併設されている。



▲ 近代橋に寄せられた設計者の「思い」は現柱に反映されるが、殿橋の石造親柱の規模と意匠の豊かさからは「岡崎の門戸を飾る」強い気持ちも伝わってくる。

▲ 高欄のデザインにも特徴があるが、1964（昭和39）年に取替られたもの。よりモダンな印象となった。



▲ 松井直雄『写真集岡崎いまむかし』（1988）戦前の殿橋の風景



▲ 乙川は昔も今も舟から殿橋を観ることができる。

